

週刊 武四郎

●毎月第五週は、
松浦武四郎のよもやま話に
ついてご紹介します

第 30 号

2018年(平成30年)10月31日(水)
発行・松阪市

監修・松浦武四郎記念館

とうじん 唐人お吉と武四郎の関係

松阪の松浦武四郎記念館には、ときどき伊豆の下田から訪れる方がいるそうです。

「唐人お吉についての展示がなぜないのですか？」

と、決まって尋ねられるという話を、記念館の山本命学芸員から伺いました。

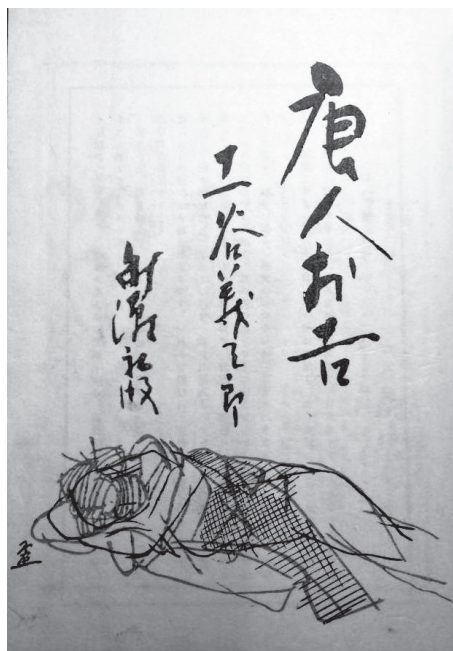
「松浦武四郎と唐人お吉って、何か関係あったっけ？」

それが一転して、唐人お吉の研究者の間では、

「ハリスの元を去ったお吉は、松浦武四郎と共に京都に上り祇園の芸者となって武四郎の勤王活動を陰で支えた」

ってことになっているんです。

もちろん、唐人お吉と呼ばれた齋藤きちという女性はい実在の人物。でも、松浦武四郎側の資料にお吉の名前はまったく見当たりません。だいたい文久から



▲『時の敗者 唐人お吉』十一谷義三郎著
木村荘八画 新潮社(1930年)

慶応年間、武四郎さんは(自伝を読む限り)ほとんど江戸にいて、茨城・千葉に出掛けた記録があるだけで、京都には足を運んだ形跡はありません。やっと一粒種の娘が生まれて武四郎さん、もっとも家庭的な時期なんです。

実は昭和二(一九二七)年に下田の郷土史家村松春水氏によって『実話唐人お吉』という本が出版された時、なぜかこの

本の中に武四郎さんが下田から足代弘訓に宛てた手紙が引用されているのです。地震でロシアの船が座礁した内容だったので、足代の元から広く攘夷の志士たちの間では筆写され広まったといわれている文献なのです

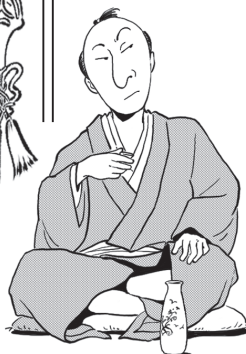
が、どうやらこの本から「松浦武四郎」攘夷の志士」というキャラクターが作り出されてしまったようです。翌年にはこの村松本を元に十一谷義三郎の

『唐人お吉』『時の敗者 唐人お吉』、戯曲では真山青果の『唐人お吉』『唐人お吉と攘夷群』など、昭和五年頃まで一大へお吉ブームが巻き起こり、映画もたくさん創られました。昭和三年が戊辰戦争からちょうど一巡した六十年目の戊辰の年であったことも影響していたのでしょう。

もはやこれらの出版物が刊行されて早九十年。今となっては史実も創作も歴史の彼方に見え隠れするばかりです。

松浦武四郎 (1818～1888)

三重県松阪市出身。幕末から明治にかけての探検家、著述家、蒐集家。蝦夷地(今の北海道)を6度にわたり探査し、アイヌの人々と交流を深め、蝦夷地の詳細な記録や地図を作成した。維新後、蝦夷地に代わる新たな名称として(北海道)のもととなる(北加伊道)を含む6案を政府に提案したことから(北海道の名付け親)と称される。



文・河治和香 装画・りんたろう 編集・細山田正人 デザイン・DOMDOM

●松浦武四郎を主人公とした小説『がいなもん 松浦武四郎一代』(河治和香著)が、小学館より好評発売中!

